

# 日蓮大聖人御書全集

みよういちによごへんじ

## 妙一女御返事

そくしんじょうぶつほうもん

## （即身成仏法門）

新版  
2124  
ゝ  
2131

みよういちによごへんじ　そくしんじようぶつほうもん

# 妙一女御返事（即身成仏法門）

こうあん　ねん

がつ　にち

さい

みよういちによ

弘安3年（'80）

7月14日

59歳

妙一女

と

い

にほんこく

ろくしゅう

しちしゅう

はつしゅうあ

問うて云わく、日本国に六宗・七宗・八宗有り。いず

しゅう

そくしんじようぶつ

た

れの宗に即身成仏を立つるや。

こた

い

でんぎようだいし

こころ

ほけきよう

かぎ

答えて云わく、伝教大師の意はただ法華経に限り、

こうぼうだいし

こころ

しんごん

かぎ

弘法大師の意はただ真言に限れり。

と

い

しょうこ

問うて云わく、その証拠、いかん。

こた

い

でんぎようだいし

しゅうく

い

まさ

し

答えて云わく、伝教大師、秀句に云わく「当に知るべし、

たしゅう

よ

きよう

そくしんにゆうな

いちぶん

他宗の依るところの経には、すべて即身入無し。一分

そくにゆう

はちじいじよう

ゆず

ぼんぷしん

ゆる

即入すといえども、八地已上に推つて凡夫身を許さず。

てんだいほつけしゆう

そくにゆう

ぎあ

うんぬん

い

天台法華宗のみ、つぶさに即入の義有り」云々。また云わ

のうけ しよけ

りやつこうな

みようほうきようりき

そくしんじようぶつ

く「能化・所化ともに歴劫無し。妙法経力もて即身成仏

とううんぬん

い

まさ

し

もん

じようぶつ

す」等云々。また云わく「当に知るべし、この文は、成仏す

ひと と

きよう

いせい

あらわ

とううんぬん

るところの人を問うて、この経の威勢を顕すなり」等云々。

しゃく まころ

そくしんじようぶつ

ほけきよう

かぎ

この釈の心は、即身成仏はただ法華経に限るなり。

と

い

こうぼうだいし

しようこ

問うて云わく、弘法大師の証拠、いかん。

こた

い

こうぼうだいし

にきようろん

い

ぼだいしんろん

答えて云わく、弘法大師、二教論に云わく「菩提心論に

い

ただしんこん

ほう

なか

そくしんじようぶつ

ゆえ

云わく『唯真言の法の中にのみ即身成仏す。故に、これ

さんまじ ほう と しよきよう なか か さと

三摩地の法を説く。諸教の中において闕いて書かず。諭し

い ん りゆうじゆだいしろう つく せんぶ ん

て曰わく、この論は、竜樹大聖の造るところの千部の論の

なか ひぞう かんじん ん なか しよきよう い

中に秘蔵・肝心の論なり。この中に『諸教』と謂うは、

たじゆゆうしん へんげしんとう と ほう もろもろ けんきよう

他受用身および變化身等の説くところの法、諸の顕教な

さんまじ ほう と じしやうほつしん しよせつ ひみつ

り。『これ三摩地の法を説く』とは、自性法身の所説、秘密

しんごん さんまじ ぎよう い こんごうちやうじゆうまんじゆ きよう

真言の三摩地の行これなり。謂わく金剛頂十万頌の經

とう

等これなり」。

と い りやうだいし た ぎ すいか

問うて云わく、この両大師の立つるところの義、水火な

しん

り。いずれを信ぜんや。

こた

い

にだいし

だいしろう

どうねん

答えて云わく、この二大師はともに大聖なり。同年に

につとう

りようになおな

しんこん

みつきよう

でんじゆ

でんぎようだいし

入唐して、兩人同じく真言の密教を伝受す。伝教大師の

りようかい

し

じゆんぎようわじよう

こうぼうだいし

りようかい

し

けいかわじよう

両界の師は順曉和尚、弘法大師の両界の師は恵果和尚

じゆんぎよう

けいか

ににん

ふくう

みでし

ふくう

なり。順曉・恵果の二人ともに不空の御弟子なり。不空

さんぞう

だいにちによらいろくだい

みでし

そうでん

もう

ほんじん

三蔵は大日如来六代の御弟子なり。相伝と申し、本身とい

せけん

おも

にちがつ

そう

しん

異

い、世間の重んずること日月のごとし。左右の臣にことな

まつがく

はだえ

ぜひ

さだ

あくみようてんか

らず。末学の膚にうけて是非しがたし。定めて悪名天下に

じゆうまん

だいなん

み

まね

まごころ

充滿し、大難をその身に招くか。しかりといえども、試み

なん

りようぎ

ぜひ

きゆうめい

に難じて両義の是非を糾明せん。

問うて云わく、弘法大師の即身成仏は真言に限ること、

きようもん

ろんもん

いずれの経文、いずれの論文ぞや。

こた

い

こうぼうだいし

りゆうじゅぼさつ

ぼだいしんろん

よ

答えて云わく、弘法大師は竜樹菩薩の菩提心論に依るな

り。

と

い

しょうこ

問うて云わく、その証拠、いかん。

こた

い

こうぼうだいし

にきようろん

ぼだいしんろん

ひ

い

答えて云わく、弘法大師、二教論に菩提心論を引いて云

ただしんごん

ほう

なか

ないししよきよう

なか

か

わく「唯真言の法の中にのみ乃至諸教の中において闕いて

か

うんぬん

書かず」云々。

と

い

きようもんあ

問うて云わく、経文有りや。

こた い こうぼうだいし そくしんじようぶつぎ い ろくだい  
答えて云わく、弘法大師、即身成仏義に云わく「六大は

むげ つね ゆが ししゆ まんだ おのおのはな さんみつ  
無礙にして常に瑜伽なり。四種の曼荼は各離れず。三密

かじ そくしつ あらわ じゆうじゆう たいもう  
加持すれば速疾に顕る。重々にして帝網のごとくなるを

そくしん な ほうねん さはんによ ぐそく しんのう しんじゆ せつ  
即身と名づく。法然として薩般若を具足す。心王・心数は刹

じん す おのおの ごち むさい ち ぐ えんきようりき ゆえ  
塵に過ぎたり。各五智の無際の智を具す。円鏡力の故に

じつ かくち とううんぬん  
実の覚智なり」等云々。

うたが い しゃく きようもん よ  
疑って云わく、この釈はいずれの経文に依るや。

こた い こんごうちようきよう だいにちきようとう よ  
答えて云わく、金剛頂経・大日経等に依る。

もと い きようもん  
求めて云わく、その経文、いかん。

こた い こうぼうだいし しょうもん い い

答えて云わく、弘法大師、その証文を出だして云わく「こ

さんまい しゅ もの げん ぶつぽだい しょうもん い

の三昧を修する者は、現に仏菩提を証す」文。また云わく

み す じんきやうつう たいとく だいくうい ゆうほ

「この身を捨てずして神境通を逮得し、大空位に遊歩して

しんひみつ じやうもん い われ ほんぶしょう さともん

身秘密を成ず」文。また云わく「我、本不生を覚る」文。

い しょうほう もと ふしょう うんぬん

また云わく「諸法は本より不生なり」云々。

なん い きやうもん だいにちきやう こんごうちやうきやうもん

難じて云わく、これらの経文は大日経・金剛頂経の文

きやうもん だいにちにやらい じやう

なり。しかりといえども、経文は、あるいは大日如来の成

しょうがく もん しんこん ぎやうじゃ げんしん ごつうもん

正覚の文、あるいは真言の行者の現身に五通を得るの文、

じゆうえこう ぼさつ げんしん かんぎじ しょうとくもん

あるいは十回向の菩薩の現身に歓喜地を証得する文にし

しょうじんとくにん

て、なお生身得忍にあらず。いかにいわんや即身成仏を

そくしんじようぶつ

や。

ぼだいしんろん

ひと

きよう

ろん もと

ただし、菩提心論は、一つには経にあらず。論を本とせ

せじようこうげ

とが

ほう

よ

にん

よ

ぶつせつ

そうい

ば背上向下の科、「法に依って人に依らざれ」の仏説に相違

す。

とうじ

しんごんし

にちれん

あつく

い

なんじ

ぼんぷ

東寺の真言師、日蓮を悪口して云わく「汝は凡夫なり、

こうぼうだいし

さんじ

ぼさつ

なんじ

しょうじんとくにん

弘法大師は三地の菩薩なり。汝いまだ生身得忍にあらず、

こうぼうだいし

みかど

がんぜん

そくしんじようぶつ

げん

なんじ

ちよくせん

弘法大師は帝の眼前に即身成仏を現す。汝いまだ勅宣

う

だいし

にほんこく

し

とううんぬん

を承けざれば、大師にあらず、日本国の師にあらず」等云々

いち じかくだいし でんぎよう ぎしん みでし ちしようだいし

〈これ一〉。「慈覚大師は伝教・義真の御弟子、智証大師は

ぎしん じかく みでし あんねんかしよう あんえかしよう みでし

義真・慈覚の御弟子、安然和尚は安慧和尚の御弟子なり。

さんにん い ほつけてんだいしゆう り ひみつ そくしんじようぶつ

この三人云わく『法華天台宗は理秘密の即身成仏、

しんごんしゆう じりくみつ そくしんじようぶつ うんぬん でんぎよう こうぼう りようだいし

真言宗は事理俱密の即身成仏』云々。伝教・弘法の両大師、

疎 しょうにん へんぱ

いずれもおろかならねども、聖人は偏頗なきゆえに、慈

かく ちしよう あんねん さんし でんぎよう やま す

覚・智証・安然の三師は伝教の山に栖むといえども、その

ぎ こうぼう とうじ こころ にほんこく しひやくよねん

義は弘法・東寺の心なり。したがって日本国、四百余年は

いぎ なんじ ふしよう み あくぎ そん

異義なし。汝、不肖の身として、いかんがこの悪義を存す

に

るや」〈これ二〉。

こた い あつく 吐 あくしん 起 なんじ  
答えて云わく、悪口をはき悪心をおこさば、汝において

ぎもう しょうぎ き もう もう  
はこの義申すまじ、正義を聞かんと申さば申すべし。ただ

なんだち もの もの 言 詰 思  
し、汝等がようなる者は、物をいわずばつまりぬとおもう

あくしん 起 あつく  
べし。いうべし。悪心をおこさんよりも、悪口をなさんよ

そうろうきようもん い なんじ しん  
りも、きらきらとして 候 経文を出だして、汝が信じま

こうぼうだいし ぎ 助 あつく あくしん  
いらせたる弘法大師の義をたすけよ。悪口・悪心をもつて

きようもん そくしんじようぶつ な  
おもうに、経文には即身成仏無きか。

じかく ちしよう あんねんとう かく しょう  
ただし、慈覚・智証・安然等のことは、これまた覚・証の

りようだいし にほん きようだいし しん かんど 渡  
両大師、日本にして教大師を信ずといえども、漢土にわた

りて有りし時、元政・法全等の義を信じて、心には教大師  
の義をすて、身はその山に住すれどもいつわりてありしな  
り。

問うて云わく、汝がこの義はいかにしておもいいだしけ  
るぞや。

答えて云わく、伝教大師の釈に云わく「当に知るべし、

この文は、成仏するところの人を問うて、この経の威勢を

顕すなり」とかかれて候は、上の提婆品の「我は海中に

おいて」の经文をかきのせてあそばして候。釈の心は、

ひともう

そくしんじょうぶつ

ひと

もち

いかに人申すとも即身成仏の人なくば用いるべからずと

書

たま

じゆんえんいちじつ

きよう

かかせ給えり。いかにも、純円一実の経にあらずば

そくしんじょうぶつ

どうり

だいにちきよう

こんごうちようきようとう

即身成仏はあるまじき道理あり。大日経・金剛頂経等の

しんごんきよう

ひと

きようもん

み

けん たん たい

真言経には、その人なし。また経文を見るに、兼・但・対・

たい むねふんみよう

にじょうじょうぶつ

くおんじつじよう

跡

削

帯の旨分明なり。二乗成仏なし。久遠実成あとをけずる。

じかく ちしよう

ぜんむい

こんごうち

ふくうさんぞう

しゃく

誑

慈覚・智証は、善無畏・金剛智・不空三蔵の釈にたばら

ひとびと

けんじん

しょうにん

思

かされておわするか。この人々は、賢人・聖人とはおもえ

とお

たつと

ちか

侮

ひと

か

さんぶきよう

ども、遠きを貴んで近きをあなずる人なり。彼の三部経に

いん しんごん

化

だいじ

そくしんじょうぶつ

どう

忘

印と真言とあるにばかされて、大事の即身成仏の道をわす

ひとびと

とうじえいざん

ひとびと

ほけきよう

れたる人々なり。しかるを、当時叡山の人々、法華經の

そくしんじようぶつ

様

もう

じかくだいし

あんねんとう

即身成仏のようを申すようなれども、慈覺大師・安然等の

そくしんじようぶつ

ぎ

か

ひとびと

そくしんじようぶつ

うみようむじつ

即身成仏の義なり。彼の人々の即身成仏は、有名無実の

そくしんじようぶつ

ぎもつぱ

でんぎようだいし

ぎ

そうい

きよう

即身成仏なり。その義専ら伝教大師の義に相違せり。教

だいし

ぶんだん

み

す

す

ほけきよう

こころ

大師は、分段の身を捨てても捨てずしても、法華經の心に

そくしんじようぶつ

かくだいし

ぎ

ぶんだん

み

捨

ては即身成仏なり。覺大師の義は、分段の身をすつれば

そくしんじようぶつ

思

そくしんじようぶつ

即身成仏にあらずとおもわれたるか。あえて即身成仏の

ぎ

知

ひとびと

義をしらざる人々なり。

もと

い

じかくだいし

でんぎようだいし

あ

たてまつ

なら

求めて云わく、慈覺大師は伝教大師に値い奉って習い

そうでん

なんじ

しひやくよねん

ねんき

隔

相伝せり。汝は四百余年の年紀をへだてたり、いかん。

こた

い

し

くち

つた

ひとかなら

誤

答えて云わく、師の口より伝うる人必ずあやまりなく、

のち

尋

明

ひと

疎

きようもん

捨

後にたずねあきらめたる人おろそかならば、経文をすてて

しえ

ぼさつ

付

ふぼ

ゆず

じよう

くでん

もち

四依の菩薩につくべきか、父母の譲り状をすてて口伝を用

でんぎようだいし

おんしやく

むよう

じかくだいし

くでん

いるべきか。伝教大師の御釈、無用なり。慈覚大師の口伝、

しんじつ

真実なるべきか。

でんぎようだいし

しゆうく

もう

おんふみ

いつさいきよう

じゆう

伝教大師の秀句と申す御文に一切経になきことを十

出

そろう

だいはいち

そくしんじようぶつけどうしろう

書

いだされて候に、第八に即身成仏化導勝とかかれて、

つぎしも

まさ

し

もん

じようぶつ

ひと

次下に「当に知るべし、この文は、成仏するところの人を

と きよう いせい あらわ ないしまさ し たしゅう

問うて、この経の威勢を顕すなり乃至当に知るべし、他宗

よ きよう そくしんにゆうな とううんぬん

の依るところの経には、すべて即身入無し」等云々。こ

しやく そむ かくだいし じりくみつ だいにちきよう そくしんじようぶつ

の釈を背いて、覚大師の事理俱密の大日経の即身成仏を

もち

用いるべきか。

もと い きようだいし しやく なか ぼだいしんろん ただ じ

求めて云わく、教大師の釈の中に菩提心論の「唯」の字

もち しやくあ いな

を用いざる釈有りや不や。

こた い しゅうく い のうけ しよけ りやつこうな

答えて云わく、秀句に云わく「能化・所化ともに歴劫無

みようほうきよううりき そくしんじようぶつ とううんぬん

し。妙法経力もて即身成仏す」等云々。この釈は、

ぼだいしんろん ただ じ もち み そうろう

菩提心論の「唯」の字を用いずと見えて候。

と

問うて云わく、

ぼだいしんろん

もち

りゆうじゆ

もち

菩提心論を用いざるは竜樹を用いざるか。

こた

い

おそ

やくしや

ま

しじよう

答えて云わく、

「ただし、恐らくは、

訳者、曲げて私情に

こころ

え

会せるならん」の心なり。

うたが

い

やくしや

もち

ほけきよう

らじゆう

もち

疑って云わく、

訳者を用いざれば、

法華經の羅什をも用

いるべからざるか。

こた

い

らじゆう

げんしよう

ふくう

げんしよう

答えて云わく、

羅什には現証あり、不空には現証なし。

と

い

しょう

問うて云わく、

その証、いかん。

こた

い

した

や

しょう

き

答えて云わく、

舌の焼けざる、

証なり。

つぶさには聞く

べし。

もと い かく しようとう  
求めて云わく、 覚・証等はこのことを知らざるか。

こた い りようにん む いとう さんぞう しん ゆえ  
答えて云わく、この両人は無畏等の三蔵を信ずるが故に、

でんぎようだいし しようぎ もち  
伝教大師の正義を用いざるか。これ則ち、人を信じて法を

捨 ひとびと  
すてたる人々なり。

と い にほんこく かく しよう ねんとう は  
問うて云わく、日本国にいまだ覚・証・然等を破したる

ひと  
人をきかず、いかん。

こた い こうぼうだいし もんけ かく しよう もち  
答えて云わく、弘法大師の門家は覚・証を用いるべしや。

かく しよう もんけ こうぼうだいし もち  
覚・証の門家は弘法大師を用いるべしや。

と い りようほう ぎそうい なんじ ぎ  
問うて云わく、両方の義相違すといえども、汝が義の

すいか

ひぼうしょうほう

ごとく水火ならず。誹謗正法とはいわず、いかん。

こた

い

ひぼうしょうほう

そうみよう

げどう

答えて云わく、誹謗正法とは、その相貌いかん。外道が

ぶつきよう

謗

しょうじよう

だいじよう

ごんだいじよう

じつだいじよう

仏教をそしり、小乗が大乗をそしり、権大乘が実大乘

くだ

じつだいじよう

ごんだいじよう

ちから

合

せん

を下し、実大乘が権大乘に力をあわせ、詮ずるところは

しょう

れつ

ほう

背

ほうぼう

もう

勝を劣という。法にそむくがゆえに謗法とは申すか。

こうぼうだいし

だいにちきようお

ほけきよう

けごんぎよう

すぐ

もう

弘法大師の大日経を法華経・華嚴経に勝れたりと申す

しょうもん

ほけきよう

けごんぎよう

だいにちきようとう

くだ

もん

は証文ありや。法華経には華嚴経・大日経等を下す文、

ふんみよう

いこんとう

とう

こうぼうたつと

分明なり。いわゆる「已今当」等なり。弘法尊しといえ

しゃか

たほう

じつぼうふんじん

しよぶつ

そむ

たいかまぬか

がた

ども、釈迦・多宝・十方分身の諸仏に背く大科免れ難し。

事じをけんもん権門よに寄せて日蓮をおどさんより、ただ正まさしき文もんを

出いだせ。汝等なんだちは人ひとをかとうどとせり。日蓮は日月・帝釈・

梵王ぼんのうをかとうどとせん。日月、天眼にちがつを開いて御覧てんげんあるべし。

はたまた、日月の宮殿にちがつには法華經ほけきようと大日經だいになきようと華嚴經けこんぎようとおわ

すとき校合ようしあわせて御覧ごらん候え。弘法・慈覺・智証・安然こうぼう

の義ぎと日蓮にちれんが義ぎとは、いずれか勝すぐれて候。日蓮が義き、

もし百千ひやくせんに一つひとも道理どうりに叶かなつて候わば、いかにたすけさ助

せ給たまわぬぞ。彼かの人々ひとびとの御義おんぎ、もし邪義じゃぎならば、いかに、日本にほん

国こくの一切衆生いっさいしゆじようの無眼むげんの報むくいをえ候わんをば、不便ふびんとは

思 そいう

おぼせ候わぬぞ。

にちれん にど るさい けつく くび およ しやか たほう じつぼう

日蓮が二度の流罪、結句は頸に及びしは、釈迦・多宝・十方

しよぶつ おんくび き ひと にちがつ ひとり

の諸仏の御頸を切らんとする人ぞかし。日月は一人にてお

してんげ いっさいしゆじよう まなこ いのち にちがつ

わせども、四天下の一切衆生の眼なり、命なり。日月は

ぶつぼう 嘗 いこうせいりよく ま たも み そうろう ぶつぼう

仏法をなめて威光勢力を増し給うと見えて候。仏法の

味 違 ひと にちがつ おんちから 奪 ひと いっさい

あじわいをたがうる人は日月の御力をうばう人、一切

しゆじよう かたき にちがつ ひかり はな かれ いただき

衆生の敵なり。いかに、日月は光を放つて彼らが頂を

照 じゆみよう えじき 与 養 たも か さん

てらし、寿命と衣食とをあたえてやしない給うぞ。彼の三

だいし みでしとう ほけきよう ひぼう にちがつ

大師の御弟子等が法華経を誹謗するは、ひとえに日月の

みこころ い

たま ぼう

たも

ぎ

御心を入れさせ給いて謗ぜさせ給うか。その義なくして

にちれん

僻 ごと

につてん

示

かれ

召 合

日蓮がひが事ならば、日天もしめし、彼らにもめしあわせ、

ことわり 負

こころ

翻

てんじゆ

その理にまけてありともその心ひるがえらずば、天寿を

召 取

もめしとれかし。

ぎ

りふじん

かれ

猿

こ

いぬ

その義はなくして、ただ理不尽に彼らにさるの子を犬に

預

鼠

こ

ねこ

賜

打

預

あずけ、ねずみの子を猫にたぶようにうちあずけて、さん

責

たま

かれ

ばつ

たま

こころ 得

さんにせめさせ給いて彼らを罰し給わぬこと、心えられず。

にちれん

にちがつ

おん

だいじ

おん

敵

日蓮は日月の御ためにはおそらくは大事の御かたきなり。

きようしゆしやくそん

みまえ

必

訴

もう

とき

教主釈尊の御前にてかならずうつたえ申すべし。その時

恨

たも

にちがつ

ちじん

かいじん

聞

うらみさせ給うなよ。日月にあらずとも、地神も海神もきか

にほん しゅごしん

にちれん きよくい

れよ。日本の守護神もきかるべし。あえて日蓮が曲意はな

おんはか

遅々

たま

きなり。いそぎいそぎ御計らいあるべし。ちちせさせ給い

にちれん

恨

たも

なんみようほうれんげきよう

て、日蓮をうらみさせ給うなよ。南無妙法蓮華経、

なんみようほうれんげきよう

きようきようきんげん

南無妙法蓮華経。恐々謹言。

しちがつじゅうよつか

七月十四日

にちれん

かおう

日蓮 花押

みよういちによごへんじ

妙一女御返事